岡山畜産便り 1962.03・04

畜産試験場だより

和牛試験場

暖かい日光が野山にふりそそぎ、ここ千屋の山奥にもようやく春がやってきました。今年の冬は近年にないきびしいもので、１月、２月は連日のように雪が降り人も牛も１メートル近くの積雪に囲まれて暮しました。この春のありがたさは、県南地方の方々の想像以上のものがあります。

和牛試験場の近頃では、和牛も豚もつとめて日光浴をさせ、冬の間の悪環境をとりかえそうとしています。まとまった広場の少ない場内ではありますが、牛のつなぎ場なども場員の作業によって整備しつつあります。場内美化と庇陰樹を兼ねて、少しではあるが植樹もやっています。ランドレースも発育よく、生後 10～13 ヵ月のものが 160 から 200 キログラムの大きさになり、種付も殆んどおこないました。県内豚の改良増産の先駆としての使命をもつこれらの第２世が、お目見えするのもごく間近いことです。

春日に遊ぶ運動場のランドレース

さて前回に少し述べた肥育試験が終了したので、簡単に結果をお知らせします。

（１）和牛の産肉能力に関する種雄牛の後代検定では、第三安達号と第二難波号の産犢５頭ずつを供用し、１年間に 450 kgを目標として、それぞれの産肉能力を検定しました。全期間を通じて１日あたり増体量は第三安達群 0.770 kg、第二難波群 0.698 kg でした。解体成績は、枝肉量は第三安達群がよく、歩留りは両者大差なく、いずれも良好でした。肉質は、さし筋間脂肪量については第二難波群がややよく、ロース芯の大きさは第三安達群の方が良好でした。以上の結果より両者それぞれ特長はありますが、総体的には第三安達の方がすぐれているといえましょう。

（２）和牛の経済的肥育　促進の一助としておこなう自給飼料を主とした肥育試験は、雌牛と若牛の二肥育様式について検討しました。

（イ）雌牛普通肥育では、飼料給与を体重 100 kg あたり１日量として、試験区は濃厚飼料 0.65—1.15 kg、粗飼料（風乾物換算）2.1—1.2 kg とし、対照区は濃厚飼料 1.5—1.85 kg、粗飼料 1.3—0.7—kgとしました。その結果は、１日平均あたりの増体量は、試験区 0.961 kg、対照区 0.974 kgで大差がありませんでした。収支概算は販売価格において試験区は対照区より安かったが、飼料費は極めて安くてすみ、結局１日あたりの粗収入は試験区 71.78 円、対照区 55.90 円でした。

（ロ）若牛肥育では、体重 100 kgあたり１日給与量は、試験区が濃厚飼料 0.5—1.15 kg、粗飼料（風乾物換算）2.5—1.5 kgとし、対照区が濃厚飼料 1.55—1.95 kg、粗飼料 1.5—0.6 kg としました。その成績は、１日平均増体量は試験区 0.747 kg、対照区 0.881 kgでした。肉質は大差なく、歩留りは対照区によい結果が出ました。収支概算は、試験区が販売価格は安かったが、飼料費はあまりかかっていないので、結果においてよい成績をあげました。

（ハ）雌牛、若牛ともに自給飼料を主とした方が経済的にはよく、今後の和牛肥育の方向を示唆するものがあるといえます。これらの成績については、近く印刷物として出す予定です。

時代の要請につれて和牛頭数の増加が望まれている時、岡山県でも今後 10 年間にいかにして 25 万頭にするかは重要な課題です。よい牛を多頭飼育するためには、まず順序として生産地が奮起しなければなりません。しかしながら千屋周辺の農家では、こ

こ数年一等生産地としう銘柄の上にあぐらをかいて、急テンポで進む畜産の発展に冬眠していたきらいがないではありません。そこで農家の飼育熱を高め、多頭飼育を主体とした近代経営に向う素地を固めるため、千屋和牛研究会（仮称）が作られました。これは地元の１―２人の青壮年の方と話し合っている中に機運が盛上がったもので、熱心な農家の方の集いであります。運営は毎月１回会合をもち、場職員が指導するのです。２月に第１回の集りをもち、早速畜産経営について話し合いました。３月は牧草播種期に備えて飼料作物の話と、春の登録検査に備えて新審査標準による審査実習をおこないました。この時は参加人員も婦人数名を含めて、約 60 名もありました。今後の発展を期待されているようで、次第に現状打破への機運も感じられてゆきます。

２月 16 日には千屋で中国地方各県の農試経営部長会議が開かれました。その席上、中国農試経営部長より新営濃類型の策定ということについて説明がありました。これは適地適産を、将来の農業の見通しをもった新しい技術と設計のもとに経営してゆくというのであります。和牛については、山口、広島２県より設計案が提出され、検討されました。経営研究者によるこのような集いが、現地研究会として千屋でおこなわれ、岡山和牛地帯の牛と環境をじかに知ってもらい、また場員も経営について啓発を受け、有意義でした。

今年も３月下旬には、場の講習生が１年間の修学を終えて巣立っていきました。

このようにして場の近況は、春とともに伸びる草木のごとく、進展する畜産の息吹きを感じながら、ますます「陽のあたる和牛」にすべく頑張っています。

（和牛試験場　三代伍朗）

養鶏試験場

◎昭和 36 年度の畜産技術講習生（養鶏）は 13 名でありましたが、養鶏試験場での１ヵ年、実習を主体とした講習は、養鶏指導員として就職しても、また自家で営農に携るにしても、非常に効果があったと思われます。
13 名の内９名は、農協等団体に就職が内定し、３月下旬終了式をおこないます。

◎昭和37年度に当場で実施します主な試験研究項目は次のとおりでありますが、前年度に関連のものもあり、また、鶏のロイコチトゾーン病に関する試験は、岡山県ロイコチトゾーン病研究普及会とタイアップして実施することになっています。

１、経営関係

１、時期別孵化鶏の経済試験

２、管理関係

１、多羽数飼育に関する試験
（１）ケージ管理における防暑に関する試験
（２）不快指数が産卵鶏に及ぼす影響について
（３）ケージ管理における軟便防止に関する試験
（４）ケージ管理における防寒に関する試験
（５）ケージ管理における微量栄養素増量に関する試験

３、飼料関係

１、ブロイラー飼養標準設定に関する試験
２、産卵鶏飼養標準設定に関する試験
３、産卵鶏に対する麦類給与試験
４、鶏に対する菜種油粕給与試験

４、育種関係

１、ブロイラーの育種に関する試験
２、人工授精に関する試験
（１）微量栄養素増量に関する試験

５、衛生関係

１、コクシジウム症予防に関する試験
（１）アンプロリウムのアイメリヤ、ネカトリックスに対する効果について
２、コクシジウム症免疫に関する試験

３、鶏のロイコチトゾーン病に関する試験調査
（１）ニワトリヌカ力に関する試験調査
（２）ロイコチトゾーン病予防、治療に関する試験調査
４、育成時の環境が白血病発生に及ぼす影響について

６、生産物処理に関する試験

１、汚染卵処理に関する試験
２、鶏の簡易燻製に関する試験

◎養鶏試験場の技術普及浸透事業の一環として、組織しています岡山県種鶏改良研究会は、昭和 33 年に孵卵業者種鶏業者養鶏関係技術者等を会員にして発足し、過去４ヵ年間、種鶏改良をはじめ養鶏に関する諸問題について、あらゆる角度から研究をおこなってきましたが、あらゆる角度から研究をおこなってきましたが、今年度は更に、組織を堅実なものとしていきたいと思っています。去る、1 月 25 日総会と、本年最初の研究会を当場で開催して、本年度の主要な研究課題を決定いたしました。その主なものは、

１、鶏の改良繁殖に関する研究
２、鶏の衛生飼養管理についての調査研究
３、養鶏経営についての調査研究
４、有識経験者の講話、講習会の開催
５、試験研究資料等の配布
６、研究会の開催（年間５日程度）です。

当研究会の構成は、大別して種鶏改良に直接関係のある会員と、それ以外の会員に別れますから、本年度は研究会を開催する場合は、これらのそれぞれの会員が有効な研究ができるようなプランを樹てたいと思っていますから。採卵養鶏家の方々で入会御希望の方は、養鶏試験まで申し出ていただきたいと思います。

◎養鶏にとっては３月、４月は育雛のシーズンでありますが、最近は町村又は農協等の単位で、共同育雛施設が各所に設けられました。ここで考えさせられることは、巨大の経費を投じて設けられた協同育雛施設がフルに活用されなければならないこと。つまり、従来の養鶏農家が育雛をするために要する労力、設備、気苦労等々大変なものであり、この余剰労力、設備が成鶏の管理や増羽数に廻れば、合理的な養鶏経営ができるというもので、合理的な施設と管理により育成された共同育雛の中雛は、育成費の低廉なうえ、育成の良否は、決して小規模の自家育雛に比べて劣らないということを、再認識する必要があると思われます。このような共同育雛施設から出る雛が、その地区全域の農家に利用されることを願ってやみません。―（37・３・20）

（岩本技師）